

## 中期朝鮮語における基礎語彙

—衣服を表す語およびその関連語—

辻 星児\*

朝鮮語の歴史において、1443年のハングル創制が画期的な出来事であったことは言を俟たない。この固有の文字の発明によって、さまざまな文献が作られ、これ以降における朝鮮語の変遷が明確となる。朝鮮語史の時代区分において、このハングル創制以降、16世紀末までは、中期朝鮮語（中期語、後期中世語）と呼ばれるが、この中期語は、近世（近代）語、現代語への歴史をたどる出発点となるだけではなく、中期語以前の姿を遡るための基礎となるものである。朝鮮語の歴史は、この中期語の確実な研究の上に基礎づけられるといっても過言ではない。筆者は、この研究のための準備段階として、中期語および近世（近代）語における基礎語彙を記述することを目指しているが、その記述の一貫として、まず、中期語における身体語彙を対象に語彙の蒐集、整理および用例とその解釈等を行った（辻2015）。引き続き、本稿では、衣服に関する語彙を中心に蒐集と整理を行う。前稿では、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「言語調査票2000年版」<sup>註</sup>の調査項目およびその通し番号に基づき、基礎語彙の選定と配列を行ったが、本稿では、この調査項目と梅田(1971)の基礎語彙項目とを勘案しつつ、基礎語彙を選定した。順序としては梅田(1971)に準拠している。すなわち、同書Ⅱ「衣」の63「着物」から70「縫う」までである（各項目の見出しのあとの（）の番号は「言語調査票2000年版」のもの、＜現＞の中の項目番号は梅田(1971)のものである。なお、＜現＞には同書で取り上げられた代表的な現代語形を挙げた）。記述の仕方は、前稿と同じく、選定された各語の意味、初出の用例（初出の用例で不十分な場合は補充の用例を加えた）とその解釈（訳）、および関連語彙をできるだけ広く蒐集した。また必要に応じて注を付した。中期語で確認された語彙は、全てアクセント（傍点）を付した（L：平、H：去、R：上）（関連語のアクセントについては多くは原典で確認したが、部分的に한글학회(1992)等の表記に拠る）。また、いわゆる「朝鮮・日本資料」に該当する語彙がある場合には、日朝言語交渉史の観点から（初出でなくても）その用例も追加することとした。本稿では、前稿と同様、中期語を記した文献としては最末期となるが、仮名書き朝鮮語の資料である『高麗詞之事』所収の身体語彙（仮名書き）を付け加えた（志部(1988)）。

以下で引用した中期語の文献名を略称とともに年代順に挙げておく（刊年については福井玲（2013）第12章による）。

訓民正音（解例本）（1446）《訓民(解例)》；龍飛御天歌（1447）《龍飛》；訓民正音（諺解

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科 特任教授

本) (1447?) 《訓民(諺解)》; 釋譜詳節 (1447) 《釈詳》; 月印千江之曲 (1447) 《月曲》; 月印釋譜 (1459) 《月釈》; 楞嚴經諺解 (1461乙亥字本、1462木版本) 《楞嚴》; 法華經諺解 (1463) 《法華》; 禪宗永嘉集諺解 (1464) 《永嘉》; 救急方諺解 (1466) 《救急》; 蒙山和尚法語略録諺解 (刊經都監版他) (1467) 《蒙山》; 内訓 (1475) 《内訓》; 杜詩諺解 (1481) 《杜詩》; 三綱行實圖 (1481) 《三綱》; 金剛經三家解諺解 (1482) 《金三》; 南明集諺解 (1482) 《南明》; 佛頂心陀羅尼經諺解 (1485) 《仏頂》; 救急簡易方諺解 (1489) 《救簡》; 四声通解 (1517) 《四声》(重刊本); 翻譯朴通事 (1517頃) 《翻朴》; 翻譯小學 (1518) 《翻小》(現存は15世紀の覆刻本); 訓蒙字會(叡山本) (1527) 《訓蒙》; 新增類合 (1576) 《新類》(羅孫本); 小學諺解 (宣祖版) (1588年) 《小学》; 高麗詞之事 (内容は16世紀末) 《高麗》(引用の張数の後のa, bはそれぞれ表、裏を示す)

また、参照した主要な古語辞典は以下の通り。

南廣祐(1999) 『教學 古語辭典』 教學社

劉昌惇(1979<sup>4</sup>) 『李朝語辭典』 延世大學出版部

한글학회(1992) 『우리말 큰 사전 4 옛말과 이두』 어문각

注) [http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki\\_gen/query/aaquery-1.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm)

## 文献

梅田博之 (1971) 『現代朝鮮語基礎語彙集』 アジアアフリカ言語文化研究所

志部昭平 (1988) 「陰徳記 高麗詞之事について—文祿慶長の役における仮名書き朝鮮語資料—」  
朝鮮学会 『朝鮮学報』 128)

辻 星児 (2015) 「中期朝鮮語における基礎語彙—身体語およびその関連語—」 (岡山大学大学院  
社会文化科学研究科紀要 第39号)

福井 玲 (2013) 『韓国語音韻史の探求』 (三省堂)

## 中期朝鮮語基礎語彙：衣服

### 1. 着物 (きもの) clothes /clothing (79) <現 63.옷>

옷[H] 『大孝』 이러히실씩 님든 밧는 오솔 아니 마사 禮經을 從히시니(大孝如此人脫之衣,  
我獨不脫禮經是依)((太宗の)大孝がこのようでいらっしやるので、人は脱ぐ衣を脱がず、  
礼經に従われた) 《龍飛第92章9-44b》

『人如諺語옷爲衣(人は例えば)朝鮮語の옷「衣」)《訓民 解例終声解》

『ヲス ボ (平包) (<옷 봉)《高麗089》; ヲス ハシケラ (衣服ゲ) (<옷 밧거라)  
《高麗160》

【関連語】 옷가슴[HLH] まえみごろ; 옷거리[HLH]/옷쇄[HH] えもんかけ(衣桁、袷); 옷마외

[HLL]衣装(マ외[LL/LH]袴); 옷기슭/옷기슭[HLH]/오즈락[LLH]すそ(裾); 옷깃/옷깃[HH/LH]えり(襟); 옷밥[HH]衣食; 옷불[HL]衣服用のふろしき(衣袱);  
 갓옷[LH]皮衣(毳); 관뎨옷[LHH]冠帶; 거상옷[LLL]喪服(거상[居喪]服喪); 깃옷[RH]絹衣; 누비옷[LHH(L),LLH]綴り合わせた衣; 단옷[HH]麻衣の喪服(衰麻とも); 덕령[HH](直領)武官の上衣; 비옷[HH]麻の衣; 솜옷[RH]/솜우튀[RLH]/안옷[HH]下着; 아랫옷[LHH]下衣(裳); 옷옷[LH]上衣; 자락[HLH]えり(おくみ)((布衫)襟兒翻老上33a);  
 주름[LH]ひだ(襞)(1105); 깃옷[HH]羽衣; 터럭옷 毛衣(毳)

2. 着る(きる) 身につける wear /put on (Vt)(356) <現 64입다>

넙다[L-] 『六師』王스기 닐어 舍利弗을 업시바 새 집 지실 문게 호려터니、須達이 王스기 드러 舍利弗을 몬 미다 놀근 옷 니버 시름 마장 켜니((外道の)六師が王に言い、舍利弗を侮り、新しい家(精舎)を建てられないようにしたが、須達が王に聞いて、舍利弗を信じられず、古い衣を着て、とても憂いていた)《月曲155》

注:上記『月印千江曲155』に当たる『釈譜詳節』では、뵈든 옷 넙고(垢の付いた衣を着て)《6-27a》とある。

『가브라(衣キヨ)(<니브라)《高麗159》;ジバ テツテイラ(衣キル事)(<니마?)《高麗285》

注:넙다[L-]には「被る」の意もある(例 善慧入德 넙스바(善慧の功德をお受けし)《月曲6》)

【関連語】니피다(넙피다)[LH-]着せる; 거상넙다[LLL-]喪に服する(거상[居喪]:服喪); 마라넙다[LHL-]着替える; 뎨넙다[LL-]重ね着する; 힘넙다[HL-]助けを被る、頼る; (니블[LH]衾(ふすま)も同語源であろう)

3. 脱ぐ(ぬぐ) take off (357) <現65 벗다> (次項4「裸」参照)

벗다[L-] 『大孝』이러히실찌 느몬 밧논 오슬 아니 바사 禮經을 從히시니(大孝如此人脫之衣、我獨不脫禮經是依)((太宗の)大孝がこのようであらっしゃるので、人は脱ぐ衣を脱がず、礼經に従われた)《龍飛 第92章9-44b》

『ヲス ハシケラ(衣脱ケ)(<옷 밧거라)《高麗160》;ハサ テンドウハラ(衣脱事)(<바사-?)《高麗286》

注:現代語벗다는、中期語밧다[L-]の母音調和での対応形であり、この形も中期語벗다[L-]として見られる。中期語밧다[L-]と벗다[L-]については次項4参照。

【関連語】밧기다[LH-]脱がす、脱げる; 메밧다[RL-]/메왓다[RL-]片方の衣をぬぐ:偏袒(메다[R-]担う)

4. 裸 (はだか) nudity(512) <現66. 빨가벗다, 빨거벗다, 맨살, 맨몸>

벗다[L-] ㅍㅅ裸는 옷 바슬씨오(裸形) (裸は衣を脱ぐことで) 《月積9-36a》

벗다[L-] ㅍㅅ가난하고 궁박하여 옷 벗고 발 버서 고공든녀(貧窮裸跣行庸)(革負は)貧乏で窮迫し、裸(衣を脱いで)、裸足で雇われ仕事をし) 《翻小6-19a》

注：中期語では、벗다、벗다ともに「脱ぐ」「脱する」「免れる」等の意で用いられているが、15世紀には、벗다は「脱ぐ」、벗다は「のがれる」の意で使われることが多いようである。ㅍㅅ世尊入德 님스바 罪를 버서 (世尊の徳をこうむり罪をのがれ) 《月曲第78》  
벗다は近代になって消滅する。また、벌거벗다、벌거벗다(裸になる)は近代前期に現れる。

5. 帽子 (ぼうし) hat /cap(563) <現66.01 모자>

갓[H] ㅍㅅ如갓爲笠 (ㄱ, 例えば笠) (訓民(解例)用字例)

갓[H] ㅍㅅ父母ㅣ 병이 있거든 갓선느니 머리 빗디 아니히며(父母が病気でいらっしゃるなら、冠(かぶり物)をかぶった者は梳らず)《小学2-23a》

ㅍㅅ갓 (笠) 《高麗078》

【関連語】 갓끈[HH]帽子の紐、笠纓(ㄱ紐)； 갓모[HH]帽子の上に被る油紙で作った雨具(모帽)； 산갓[LH]編み笠(산/산簞たか(竹)むしろ)； 시육갓[LHH]毛皮の帽子(시육毛氈)； 충갓[LH]馬の鬣(たてがみ) 棕櫚などで作った帽子

갓갈[LH] かんむりㅍㅅ調達人 갓갈을 밧고 五逆 只숨을 계와 (調達(人名)は(風で)冠を落し五逆の心に打ち勝てず)《月曲130》(原典： 調達冠墮《釈迦氏譜》)

cf. 冠禮는 나히 스물히어든 첫 갓갈 쓰이는 禮라.(冠禮とは年が二十歳になると初めての冠を被せる儀式である)《三綱 忠臣図23a》

복도[LL]/복두[LL][幘頭](官服の)冠 ㅍㅅ幘복도俗呼一頭； 弁복도 변《訓蒙 中11a》； 公服 복두 관뒹라(公服は幘頭冠帶である)《小学5-42b》

【関連語】 관뒹[LH]/관뒹옷[LHH]冠帶

注：公服は正式の官服。幘頭を被り、袍に帶、黒靴に履き、笏を持つ。

관[L]官・礼服の帽子 ㅍㅅ내 옷 니피고 내 冠 쓰이고((善容に)私の服を着せ、私の冠をかぶらせ)《釈詳24-27b》(原典：命聽王子著吾服飾天冠威容命《釈迦譜》)

갓모[LH] (馬毛などで編んだ官帽(小帽)) ㅍㅅ옷 고의 갓모 휘돌히란 다 이 궤 안해 노하 두위(衣裝帽子靴子 都放在這櫃裏頭)(服、袴、帽子、靴などは皆この箱の中に入れておき)《翻朴上52b》 ㅍㅅ帽・갓모又갓・토曰小一又사모紗一《訓蒙中11a》

사모[RL] [紗帽]黒い紗で作った官帽ㅍㅅ머릴 꺾튜니 사피 기울오(掉頭紗帽側) (頭を振ると紗帽が傾き)《杜詩10-31b》



6. シャツshirt ; 下着(1396) <現 66.02 속옷>

속옷[RH] 『涅槃僧은 속오시라 (涅槃僧은裏衣也)(涅槃僧は下着である)』(楞嚴5-19a)》

注：「裏衣」は下着；속：内、中

안옷[HH] 『안옷 소매 값업슨 寶珠 잇는들 아디 묻거늘(不覺內衣裏有無價寶珠)(內衣の中に無價(高価)な宝珠があるのを知らなかったの)』(法華4-43b)》

注：안옷は「內衣」の訳。「內衣」は「三衣の一つ。身にじかに着る衣」(中村元『広説佛教語大辞典』)であるが、腰にまとう僧衣の裙の意もある。

숨우티[RLH] 『어머의 숨우티를 가져다가 친히 제 색라(取親中幫廁臉身自浣滌)(親の下着を取って親しく自分が洗い)』(翻小9-85b)》

注：原文の「中幫」も「廁臉」も下着を意味する。우티[LH]は裳である。숨우티[RLH]は下着のうちでも下衣のものか。

【関連語】 고의밧[LLL]袴衣の下に穿く下着

7. うわぎcoat /jacket (1397) <現66.06 외투>

注：ここでは上衣(上半身に着る着物；上着)とし、下衣(かい：下半身に付ける衣類；下記8参照)に対する衣類とする。

옷옷[LH]上衣 『各各 모매 니분 옷오슬 바사 부텃긔 供養호스오며 (各各脱身所著上衣호야以供養供호스오며)(各々体に着ていた上衣を脱ぎ、仏に供養奉り)』(法華2-45b)》

적삼[HL/LL]ひとえの上着(衫) 『할미 적삼 비러 할미 나흘 절호도다 (借婆衫子호야 拜婆年이로다)(老婆のひとえを借りて老婆の年を拝するのだ)』(金三 3-12a)》

注：적삼のアクセント：『金剛經三家解詁解』(《金三》)では、上例および2-61aは[HL]、3-12bでは[LL]である。同年代の『南明泉繼頌詁解』でも[HL]と[LL]がある。16世紀の『翻譯朴通事』訓蒙字解』では[LL]である。おそらく[HL]>[LL]に変化したのであろう。

8. ズボン trousers(569) <現66.04바지> ; 스카트 skirt <現66.04,app.치마>

注：ここでは下衣(かい：下半身に付ける衣類：袴(子)(ズボン)、裙(も(裳)：巻スカート状のもの)を扱う⇔上衣 (上記7参照)

고의[LL] [袴衣] 袴 『곡도송 물 드린 붉근 비체 털조쳐 드러 뽀 비단과 람 고로와로 히운 괴의예 (茜紅氈段藍綾子袴兒)(茜染めの紅色に毛まで入れて織った絹と藍の綾とで作らせた袴に)』(翻老下51a)》 『옷 고의 감토 휘돌호란 다 이 퀘 안해 노하 두워(衣裳帽子靴子都放在這櫃裏頭)(衣、袴、帽子、靴などは全てこの櫃の中に入れておき)』(翻朴上52b)》

注：괴의は漢語「袴衣」であるが、中期語の漢字音では、袴は고[R]、衣의[R]である。

【関連語】 고의밧[LLL]袴衣の下に穿く下着

注：参照 꽃고의[LLL]蓼(꽃花、고의袴)；땃고의[HLL]筍の皮(대竹、고의袴)

마외[LL]袴 『雲居和尚이 侍者 브려 마외 하나를 보내신대 菴主ㅣ 날오되 나는 내 어미 나흔 마외를 뒀가니 이 하나 므슴하료.(雲居和尚が侍者を遣わし(庵主に) 袴子一着を贈られたが、庵主が言うに、私は我が母がつくった下衣を持っているが、これをして如何せむと)』《南明上 31b》

注1: 마외のアクセントは[LR]もある: 『어미 나흔 마외오 (孃生袴子) (母がつくった袴子で)』《金剛三2-61a》

注2: 마외は上記고외の母音交替による派生形か。

바디 袴 『袴 바디 고』《新增(類合) 上31a》(傍点なし) 『바ッチ (袴)』《高麗082》

치마[LL] 裙 『새 나흔니란 치마에 다마 이베 물오 물 가온되 드리 ...브르노라 하다가 치마엿 아기를 싸디오((華色比丘尼は)新しく生んだもの(子)は裙(も)にくるみ(裾を)口に銜えて水の中に入り...(長男を)呼ぼうとして裙の赤ん坊を落して)』《月積10-24a-b》(参考: 上記出典 漢文: 其新産者以裙盛之、銜著口中即前入水...開口唱喚口即失裙 『大方便仏報恩經 卷5』)

츄마[LL] 裙 『츄마 군女服俗呼一兒』《訓蒙中11b》; 裳 츄마상男服『訓蒙中11b』

注: 츄마は男女の下衣

아랫옷[LHH] 裳 『아비 고마를 아랫옷 썰이디 말며 (諸母를 不漱裳) (父の妾に裳を洗わせず)』《内訓1-4b》

우퇴[LH] 裳 『겨집이 드려간 사람하며 결속흔 것들홀 다 도로보내오 다[다]른 뵈우퇴를 마라넝고 (妻ㅣ乃悉婦侍御服飾하고更著短布裳하야) (妻が連れて行った人たちと装ったものを全て送り返し、短い(麻)布の裳に着替え)』《翻小9-59b》

注: 上記6の습우퇴は下着である。우퇴は下衣でも下着のような粗末なものか。

## 9. 帶, 벨트 band /belt(568) <現66.05띠>

씩[H] 帶 『물읏 보물 다키 오르면 傲慢하교 썩에 다키면 시름곤교 (およそ 見ること(視線)を顔に上げれば傲慢で、帶に下げれば憂い(ある)ごときで) (凡視를 上於面則傲하교、下於帶憂하교)』《内訓1-6b》 『스티 (帶)』《高麗084》

注: 씩[H]は紐も意味する: 『딛동 세 무슬 어더 썩로 어울워 믱야 (藁三束を得て紐で合わせ縛り)』《月積8-99a》

【関連語】엷돈[HR/LH]袴: 官服の帯につける鉤状の金属製の装飾具; 씩거리[HLH]同前; 씩와치[HLH]帯職人(注: -와치[LH]<바치[LH]工匠); 씩다[L-]帯をしめる、帯びる) 갓씩[LH]革帶; 바탕[LH]帯の皮部分; ; 다회[LH]組み紐; 세토[RH]細い組み紐

## 10. 靴 (くつ); 履物 (はきもの) (570) shoe <現 66.08 신, 신발>

신[H] 履 『ㄴ.如신爲屨.반되爲螢(ㄴは例えば신屨、반되螢である)』《訓民 用字例 終声》

『문밖과 두 시니 잇거든 말스미 들이거든 들오(戸の外に二足の履物があれば(あって)、

言葉が聞こえれば、入り) (戸外에 有二屐 | 어든 言聞則入き고)《内訓1-5b》

【関連語】 신마뽕靴型 (楨《四声重刊; 声点不明》(マ뽕[HH](靴)型、跡)); 신다[R/L-]履く;  
신썸리[HRH]履物の爪先 (注: 부리[RH]くちばし); 신창[RL]履物の底 (注: 《救急下89a》  
本例は上声のようであるが、通常の位置ではない。去声の誤刻か); 갓신[LH]皮の履物;  
나모신[LLH]木履

휘[L]靴; 丈の長い履物 (水鞋子 (雨の時の武官の長靴) や木履の類)

『히다가 모든 比丘 | ...이 사했 휘와 신과...醍醐를 넘디 아니키면 (若諸比丘 | 不服...是土엿 靴  
履...) (もし全ての比丘が...この地にある靴と履と...醍醐を服さなければ)《楞嚴6-96b》  
注: 靴の中期語漢字音は화[L]である。휘[L]はその母音交替形であるとみられる。

【関連語】 휘운[LH]革靴の側面; 휘돈同前; 휘청[LL]木履の足袋

격지[LH]木の履物、木履(はくり)

『稀疏히 저근 붉은 꽃과 푸른 잎 서리에 격지를 머물워 殘微히 香氣를 갖가이 호라.  
(稀疏小紅翠 駐屐近微香)(まばらで小さい紅い花と青い葉の間に木履をとどめ、残り香を  
近くするのだ)《杜詩10-32a》

【関連語】 나모격지木履(<《四声》声点なし)

#### 11. 靴下 (くつした) socks (8.570.1) <現なし> (버선 伝統的な足袋)

보선[LL] 襪(たび 足袋) 『頭巾과 보선과 횡던을 밋디 아니키야 (不得去巾襪縛袴키야)  
(頭巾と足袋と脚絆を取らず)《内訓 3-17a》

청[L] 襪(たび 足袋) (보선[LL]の違いは不明) 『흰 마는 시욱 청에 (白絨氈襪上)  
(白く細い毛氈の足袋に)《翻朴 上26b》

【関連語】 휘청[LL]木履の足袋

#### 12. 布地 (ぬのじ)、織物 (おりもの) (1395) <現 66.10布 천, 옷감>

뵈[H]『七寶로 일우습거나...옷과 뵈와로 佛像을 꾸미스뵈도((仏のために像を造るのだから)  
七宝で造りあげようと...漆と布とで仏像を飾り申しあげても (みな仏道をなすのであり))  
《釈詳13-52a》

【関連語】 뵈늘다[HH-]布を織る (縦糸を通す); 뵈당[HR] (麻) 布の天幕 (布帳); 뵈옷  
[HH]麻の衣; 뵈우티[HLH] (麻) 布の裳 (치마); 뵈틀[HH/LH]機 (はた); 모시뵈 /  
모시외[LLH]苧麻 (からむしの布) (모시외は《翻朴上51b》); 뵈모시뵈[LLLH]白い苧麻;  
뵈다[H(L)-]織る; 싱뵈[LH]生布 (灰汁で煮ていない布); 터럭뵈[LLH]毛氈

#### 13. 絹 (きぬ) silk (1393) <現 66.14명주, 비단>

비단[LH] (緋緞: 絹織物) 『(城 안햇 모든 사르미...) 값 두넉퍼네 無數히 보비엿 幢幡盖와

香花와 眞珠珞璣과 各色金線 비단과 풍류와를 식식기 꾸며 기드리습더니 (城の中にいる  
 全ての人 が…) 道の両側に無数の宝の幢幡盖と香花と眞珠珞璣と各色の金線の絹織物と音  
 楽とを厳かに飾り (世尊の舍利を) お待ちしていた) 《釈詳23-50b》

¶비탄 (縹子) 《高麗086》(参考 모탄 (段子) 《高麗085》)

注: 縹緞は韓国の漢語; 비단의アクセントは、《釈詳》《月釈》《三綱》は[LH]であるが、  
 《法華》は[LR]、《翻朴》は[RH]《訓蒙》は[LH][RH]、《翻老》は[RH][HH][RR]が  
 見られる。数的には、15世紀は[LH]、16世紀は[RH]が多い。《法華》にはLRが見られ  
 るが、これは「縹緞」の漢字声調、平上に対応する。

【関連語】원비단[LRH]無紋の絹織物(素緞); 직전[LH] (剪裁)、絹織物の) 布切れ

깃[R]絹 ¶或似上聲如…:깃為繒。( (韓国語の入声は一定せず…) 或は上声に似て) 例えば繒  
 (きぬ)の:깃の類である) 《訓民 合字解》

¶姝女 | 기배 안스바 어마났고 오습더니 大神들히 뵈시스뵈니 [太子(釈迦)の誕生] 姝女  
 (宮女)が (太子を) 絹におつつみし、お母様(摩耶夫人)のもとに参ると 大神たちが  
 (太子に) おつかえした) 《月曲 其23》

【関連語】깃다[R-]繕う; 깃누비다[RLL-]繕い綴る; 깃보타다[RLH]/깃보태다[RLH]縫い  
 つくろう; 깃세다[RL-]綾絹のように交錯する; 깃소음송[RLLL]真綿の褥; 깃옷[RH]絹衣;  
 생깃[LR][生絹]白絹

14. 麻 (あさ) flax,hemp,linen (項目なし) <現 66-12 베,삼베,삼>

삼[H]¶經은 삼으로 빙맴느니 머리 허리에 썩느니라 (經とは麻で作るが、頭腰につけるものだ)  
 《内訓1-61a》(注: 「經帶 喪服を著る時に頭及び腰にまく麻の帯をいう『大漢和辞典』)

【関連語】삼다[R/L-]編む、つむぐ

15. 毛皮 (けがわ) fur(102) <現 67가죽, 모피>

갓/갓[L]皮 (毛皮も含めて。皮膚の意味もある: 辻 (2015) 項目38 「皮膚、皮、肌」参照)

¶갓의 갓為狐皮 (狐の毛皮) 《訓民 終声解》

터럭옷[LLH]毛衣 ¶裘는 갓오시오 毳는터럭오시오.(裘は皮衣で、毳は毛衣である)《楞嚴6-96b》

注: 中期語には「毛皮」そのものを表す語は見あたらない。

【関連語】갓옷[LH]皮衣; 기즈피[LHL]麕(キョン)の毛皮

16. 櫛 (くし) comb(559) <現 67.01 빗>

빗[L] ¶ (남진과 여집패…)手巾과 빗과를 혼디 말며 (不同巾櫛き며) (男と女とが…) 手ぬぐいと  
 櫛とを同じくせず) 《内訓1-4b》

注：《翻小》《小学》ではアクセントは빋[H]（《翻小》9-59a；《小学》6-54b）

【関連語】빈혀[LL]簪（かんざし）；열에빋[LHH]目の粗い櫛；춤빋[HH]目の細かい櫛

17. 梳く（すく）、くしけずる comb (v)(559.1) <現 67.01 빋다>

빋다[L-] 『老夫 | 물곤 새배 셴 머리를 빋다니 玄都壇入道士 | 와 서르 보더라. (老夫清晨梳白頭 玄都道士來相訪) (老夫が清らかな夜明けに白い頭を梳っていると玄都壇（道教の寺）の道士が やってきてお互い会った) 《杜詩16-32a》

빋기다[LH-] (相手の毛を) 梳く、梳いてやる 『馬寶는 머리니 비치 불가꼭라코 갈기에 구스리 뻬엿거든 솔로 빋기면 놀곤 구스른 떠리디고 즉자히 새 구스리 나며 (輪王七宝のうちの 馬宝(めほう)は色が赤くて青く、鬘(たてがみ)に珠が貫いているが刷毛で梳いてやると古い 珠が落ち、すぐに新しい珠が生じる) 《月積1-27b》

【関連語】긁빋다[LL-] 掻き梳く；긁빋기다[LLH-] (相手の毛を) 掻き梳く

18. 指輪（ゆびわ） ring(1401) <現 67.02 반지, 가락지>

가락지[LLH] 『은 가락지어나 빈혜어나 몰라 숨썬든 슈은 혼량을 논화 머그면 곧 느리리라. (誤吞銀鍔及釵 水銀一兩分服之釵便下) (銀の指環や釵を知らずに飲み込んだなら、水銀1兩を 分けて飲めば、すぐに下るだろう) 《救簡6-17a》

【関連語】금가락지[LLLH]金の指環

19. 鋏（はさみ） scissors(557) <現 67.03 가위>

꺠애[LH] 『치운 젓 오솔 곧마다 꺠애와 자콰로 지소몰 뵈아느니 (寒衣處處催刀尺) (寒い時の 衣服をあちこち鋏と物差しで作るのを催促しているが(=家々は冬の衣類を用意をしているが)) 《杜詩 10-33b》

마새[LH] 『세젓 형은 헤혀고저 히고 ...세젓 형은 마새오 (三哥待要分開...三哥是剪子) ( [謎々の場面] 三番目の兄さんは開こうとする (もの)、... (答) 三番目の兄さんは鋏で) 《翻朴 上39b》

参照：河野六郎(1945)『朝鮮方言学試攷－「鋏」語考－』京城帝国大学文学会論纂第11輯  
(河野六郎(1979)『河野六郎著作集 I』(平凡社)所収)

【関連語】꺠다[L-]切る、断つ（牛頭梅檀種種香木을 마삭오라 (牛頭梅檀など種々の香木を 切って 来い) 《月積10-13b》)

20. 針（はり） needle (78) <現 68 바늘>

바늘[LH]『請 드른 다대와 노니샤 바늘 아니 마치시면 어비 아드리 사르시리잇가. (受賂之胡與之

遊行、若不中針父子其生）（請を受け入れた胡と歩き回られたが、（木に掛けた）針に（矢を）お当てにならなければ父と子が生きられたらどうか。）《龍飛 第52》

【関連語】 바늘실[LHR] / 바늘실[LHR]縫い針、針と糸； 바늘질장[LHHH]針仕事の物差し；  
바늘통[LHH]針を入れる筒； 바늘끝[LHL]針の先端； 돛바늘[LLH]ごぎ(呉)などを縫う大針；  
침[L]鍼（漢方の）はり）

## 21. 糸（いと） thread (77) <現 69 실>

실[R]ㅍ 如諺語실為絲之類（終声）ㅍは例えば韓国語の실糸の類である）《訓民 終声解》

ㅍ이 經을 닐거 외오며 五色 실로 우리 일후물 띠자 제 願을 일운 後에 글어사  
키리이다. (この経を読みおぼえ、五色の糸で我らの名を結び自らの願いを遂げた後に解けば  
いいでしょう)《釈詳9-40b》 ㅍシル（白糸）《高麗089》

【関連語】 실그물[RHH]糸の網； 실낱[RR/HR]糸筋； 실드리다[RHL-]鉄器などに金糸や銀  
糸を埋め込む； 실을[RH]一糸、わずかなこと（絲毫）； 실혀다[RL]/실혀다[RL/RR]紡ぐ  
（注 실혀다[RR]は《杜詩25-50a》に見られる。혀다[R-/H-/L-]； 혀다[L-/H-]ひく）；  
실근[RH]糸の先（糸頭）； 바늘실[LHR] / 바늘실[LHR]縫い針、針と糸（釣り針は 낚[H]）

## 22. 縫う（ぬう） sew (Vt) (353) <現 70 꿰나다>

호다[H-]ㅍ마리 사랴미 불알홀 프러 싸디거든 고류디 미리 녀코 쏘 것츠로 마늘리 실  
링마라 호고 烏鷄肝 아사 마늘리 사하라 마고 브류리니（治馬咬人陰卵脱出方推納之以  
桑皮細作線縫之取烏鷄肝細剉以封之）（馬が人の睾丸を咬んで抜け出たら（それを）治すには、  
（睾丸を）押し入れて桑の皮で細く糸をつくり、（それで）縫い、烏鷄の肝臓を取って細く刻み  
合わせてくつける）《救急 下16b》

【関連語】 꺾다[R-]縫う； 꺾누미다[RLL-]縫い綴る； 꺾보타다[RLH]/꺾보태다[RLH]縫い  
つくろう； 꺾다[H/L-]織る；

\*\*\*\*\*

前稿および本稿によって、身体および衣類に関する中期朝鮮語の語彙を蒐集、整理し、その解釈と記述を行った。今回の試みは、今後の「日本語による朝鮮語古語辞典の作成」を視野に入れながら、また通時的な比較研究の基礎資料を提供するということも念頭におきつつ、中期語における語彙記述のあり方を考えてきた。今回扱った語彙（身体、衣服）は、中期語の語彙全体からみれば、ごく一部に過ぎず、記述も不十分であることは言うまでもない。ただ、このような試みは（用例に「日本資料」の語彙を付け加えたことも含め）、おそらく初めてであり、今後の史的な語彙研究における準備段階として何らかの意義があれば幸いである。最後に、前回および今回の作業をとおしての問題点をいくつか考えて



みたい。

「基礎語彙」とは何かといった一般的問題はさておき、今回もっとも大きな問題となったのは、文献的制約である。とくに中期朝鮮語の文献の大部分は「諺解」であるため、中国語からの機械的な直訳を免れず、当時の朝鮮語の自然な使われ方が見えない場合も多いと思われる。また、内容的にも、仏典や儒教関係が多いため、使用語彙にもある種の片寄りがあることは推測される。いっぽう、類義語における意味の分析や記述については、一部を除いて、明確にすることができない場合が多かった。類義語の分析は、語彙の意味記述には、必要不可欠ではあるものの、過去の言語を扱う場合には常に大きな問題点ともなることは言うまでもない。本稿では、中期語の諸文献全体を対象とし、語彙の蒐集を行ったが、例えば、『諺解三綱行實圖』といったある程度、口語的で均質な文献に焦点をあて、そこに現れた語彙を分類したうえで、類義語を分析することで、当該文献の語彙体系を明確にしていくというアプローチも、史的な語彙研究の方法として効果があるかもしれない。

古語を扱った場合、現代語とのつながり（語形や意味用法の異同）を考察することも重要な作業となるが、これも、今回一部を除いて言及できなかった。今後の課題である。さらに、今回、基礎的な語彙とともに、その関連語については、幅広く蒐集を心掛けたが、詳しい意味や用法の記述までには至っていない。これも今後の問題点である。ただし、今回の調査で、当該語彙に関しては、ある程度、関連複合語等を網羅的に蒐集でき、同時に、その異同をみることができたと思われる。

今後は、今回の研究成果と問題点を踏まえつつ、中期語から近世（近代）語へと対象を広げた形で「日本資料」を最大限に利用した語彙記述のあり方を考えていきたい。

【付記】本稿は平成27年度科学研究費補助金、基盤研究(C)(25370479)「朝鮮語古語辞典作成のための基礎的研究」による研究成果の一部である。